

俺のフラグは よりどりみみデレ2

栗栖ティナ
挿絵／火曜



立ち読み版

◎ 登場人物紹介 ◎



さくら こうじ し おん

桜小路詩音 【属性】お嬢さま、ヤンデレ

転校初日に遼人が出逢った美少女。遼人に一目ぼれして、おしかけ女房のように振る舞う。時には嫉妬でヤンでしまうことも。



ひびき み お

響美緒 【属性】ツンデレ、幼馴染み

遼人の幼馴染みの活発な少女。通称「デレのないツンデレ」で、照れ隠して素直な態度を取れない。



すおう あい か

周防藍花 【属性】クール

いつも静かに本を読んでいるクールな少女。遼人の隣の席。



はぎ の みどり

萩野翠 【属性】女教師、ママ

聖エスタド学園の学園長。遼人とは遠縁の親戚という関係。遼人を学園に招き入れた目的があるようだが……？



こばやし じゅり

小林樹里 【属性】ヤンキー

不良少女。一匹狼な空気を漂わせている。遼人に「可愛い」と言われたことを気にしている様子。



みやした とも こ

宮下智子 【属性】委員長、メガネ

クラスの委員長。みんなのまとめ役を務めている。とても真面目な性格で、よく言い包められてしまう。



なな み え り な

七海絵里奈 【属性】腹黒

同じクラスの女の子。明るく、みんなのムードメーカー的な存在だが、それと同じくらいトラブルもふりまく。



すずむり りょうと

涼邑遼人 【属性】主人公

本作の主人公。知らず知らずフラグを立ててしまう体質の持ち主。ヒロインの「乙女の破片」の力を借りて、様々な力を使うことができる。



プロローグ

ありふれた「^{リアル}現実」
——主人公の場合

「だが……問題ない。それにも実際の反応と文章に、大きな差異があった」
「差異って……？」

——又チュツ、チュツプ！

その問いかけへの答え代わりに藍花が軽く腰を前後に振り始めると、少し捲れたスカートの裾から、そんな小さな水音が漏れ聞こえてきた。

先走り汁で濡れていた亀頭に、もつと熱くてトロリとした液体が塗り込まれる。

蕩けてしまいそうな、独特の温もり。それは——蜜液の感触。

「涼邑君の男性器を観察している間に、自然とここが熱くなってしまった。女性器は、直接的な刺激なしでも分泌液で濡れる……これも、本とは違う事実」

絶句する遼人の方を振り返ることもなく、藍花は相変わらず感情の読み取れない平然とした表情を保ったまま呟く。

（つまり……周防さんも興奮してたってこと？ そ、そうだよな）

眉一つ動かさず、頬もまったく火照っていない。普段どおりクールな水色髪の少女も、自分とのこの淫靡な行為で密かに気持ちを昂らせていた。

（やばっ、さつきよりドキドキしてきた……お、落ち着け、俺！）

自分だけが一方的に感じさせられていると思ひ込んでいたせいもあり、突然知らされた事実に、何だか妙に気持ちが昂り、くすぐったい喜びを覚えてしまう。

その間も藍花の腰は動き続け、濡れ綻んだ割れ目に亀頭が丁寧な舐められる。蕩けそうな摩擦に、思わず息を荒くし始めた——そのときだった。

「……濡れていけば、問題なく挿入できる。そう本には書かれていた」

「えっ、あつ、ちよ……！」

呆けてしまっていた遼人が、普段とまったく変わらない平坦な声で我に返った直後。

——ヌチュツ、ズリユリユリウツ！ ジュツプウツ！

卑猥な水音と共に、亀頭に感じていた熱い肉粘膜が竿の根元の方まで降りてきた。

詩音や美緒。今までに交わった経験のある二人の膣内と比べて、圧倒的に狭く、思わず顔をしかめてしまうほどの強烈な締めつけ。

「くあつ、あつ、す、周防さん……やめ……はぐつ、んんっ！」

震える声で必死に止めるが、クール少女は相変わらずの無表情でこちらを振り返ることもなく、その小ぶりの尻房が少年の太股に密着するまで腰を落とす。

特に狭まった部分を無理矢理突き破った感触とほぼ同時に、肉幹はクール少女の体格に見合った狭い膣内へ、ほぼ根元の辺りまで咥え込まれてしまった。

「は、入っちゃった、全部……うあつ、あつ……」

「……これが、性交」

とうとう、最後までしてしまった。戸惑い呻く遼人にひきかえ、膝上の藍花は息を切ら

すこともなく、普段どおりの調子で手にした文庫本に視線を向けている。

本当に興奮を感じているのかと、再び疑いたくなってしまう姿。

それを深く追求する余裕もないくらい、ペニスを包む熱肉の刺激は強烈だった。

(このきつさ、しゃ、洒落にならないって……や、やばいつ……)

じつくりと観察された挙句に手で刺激され、限界以上に勃起した肉幹。それを収めるのに、このクール少女の膣内はあまりに狭い。

このままでいると、一回りほど圧縮されてしまうのではないかと不安になるほどだ。

壁面にあまりヒダがないせいとか、壁面が竿肌に吸盤のように密着した状態。

その焼けるような熱感が芯まで伝わってきて、圧迫の息苦しさをジンと痺れる甘い刺激にすり替えてくれていた。

「す、周防さん、これ以上は本当に……はう、も、もう抜いて！」

もうカウパー腺液塗れになっていた肉棒に走る、強すぎる快感。

気を緩めた瞬間、一気に絶頂まで持っていかれそうだ。

「……無理、動けない」

悲鳴のような声で訴えかける少年へ、クール少女はきつぱりと答えてくる。

元々口数が多い方ではないが、それでもあまりにそっけない。

「動けないって……何で……」

「やはりこの本は、あまり信用できない。……初めての性交の痛みが、これほど強烈なものだとは……書かれていなかった」

「初めて……？」

(本だけじゃ感覚がわからないから実践って……つまり、経験がないってこと……)

怒涛の展開で思考回路が鈍っていた遼人は、今更、その事実に気づく。

スカートで隠されているそこから、わずかに赤いものが見えている。

それは間違いなく、この知的探究心旺盛な少女の純潔を突き破ってしまった証。

「うわっ……ご、ごめん、周防さん！ こんな……」

「……何故、謝るのか理解できない。これは私が頼んで協力してもらっていること」

頭を横殴りされたようなショックに言葉を詰まらせた少年へ、膝上の少女は相変わらず表情を変えることもなく言葉を返す。

本当に痛みを感じているのか、それすらも読み取れない。

「……可能なら、涼邑君が動いて欲しい。今、私が自分で動くのは厳しい状態」

「い、いや、でも……」

「初めての性交は、一度しか経験できない貴重なもの。しっかりと感覚を確かめたい」
広げた本のページへ視線を落としながら、戸惑う遼人へ淡々と返す藍花。

ページを捲るリズムが、いつもと違って乱れ気味。声色や表情の代わりに、それがク

ル少女の感じる痛みの大きさを教えてくれる。

(いいのかな？ 動いたら、ますます痛くなるし……そ、そうだ!!)

どうすればいいか決断できずにいた達人は、参考になるかもしれないと、先ほどから藍花が読み続けている官能小説のページを再び覗き込んでみた。

『あはあつ、そう、揉んでえっ！ ぐにゆうつて潰してえ……』

小玉の西瓜すいかを二つ並べたような乳房が、無骨な男の手で乱暴に揉み潰される。

指と指の間から弛む肉が飛び出し、頂点を飾る桜色の乳首粒は、今にもはち切れんばかりにふくらんでしまっていた。

『そう、ふふつ、遠慮しなくても……ふふつ、男の子なら大好きでしょ、大きくてエッチなおっぱい。もつと感じて……あひいっ、私もお……か、感じるのお！』

見開きのページにびっしりと書かれていた、乳房愛撫のシーン。

それを読む少年の視線に気づいたのか、水色髪の少女がポツリと咬きを漏らした。

「……これは、私では実践不可能？ 大きくなければ、性的快感は得られない？」

「へっ？ い、いや、そんなことはないと思うけど……」

「それなら、お願いしたい。乳房を触れられる感覚も、実際に経験しておきたいから」

少し沈んだ瞳で自らの慎ましい胸元を見つめていた藍花が、そう呟くや否や、おもむろに自らの手で襟元のネクタイを解き、白いシャツのボタンを外し始めた。

パサリと胸元がはだけて下から現れたのは、シヨーツと同じ水色の、慎ましい隆起を隠すに相応しいカップの小さなブラジャー。

肩越しにその一部始終を見ていた遼人が悲鳴を上げる間もなく、それがほっそりとしたお腹の方へずり下ろされていく。

「……準備はできた。お願いする」

「お願いって……で、でも……うっ……」

あらわになった、手の平で容易く覆い隠してしまうほどの、慎ましい乳房。

わずかに盛り上がった乳肌は、ミルクを溶かし込んだような美しい白さ。

それが、小指の爪ほどの大きさもない乳首の鮮やかな桜色を際立たせている。

(綺麗だな、周防さんの……確かに小さいけど、それが何か清らかな雰囲気というか……何だか凄くいけないことをする感じで、ドキドキするぞ)

目を見張るような豊かな隆起とはまた違う、清楚な魅力に視線を奪われ、思わず生唾を飲み込みながら覚悟を決める。

(周防さんの頼みだし……それに痛みを紛らわせるのにも、丁度いいよな！)

だから、これから行うことは不可抗力。そう自分を納得させた遼人は、あらわになった

小ぶりな胸元へ、ゆつくりと両手を伸ばしていく。

「……………」

その絹のように滑らかな肌へ触れた途端、藍花の口から小さな呻きが漏れる。

(や、柔らかい……………)

ブラジャー代わりに隅々まで包み込んだ乳房は、想像していた以上のふわふわとしたマシユマロのような柔らかさだ。

(女の子の胸って、大きさに関係なく柔らかいんだな。……………凄い)

大きな乳房と違って指が押し返されるような弾力は乏しいが、このしっとりとした手触りはまた違った心地よさ。

乳房が薄い分、中央にある桜色の突起がより強く手の平に食い込み、コリコリとした程よい硬さが癖になりそうだ。

「気持ちいいよ、周防さんのここ……………凄く、触り心地いい……………」

感動にも似た思いを噛み締めながら、遼人は円を描くように手の平を動かし続ける。

「……………はあつ、んつ……………くつ、あふつ……………あつ……………」

夢中で滑らかな乳肌を擦っていると、急にクール少女の息が荒く乱れ始めた。

今までピクリともしなかつた眉が切なげに震え、頬の赤みも増してきている。

「周防さん、大丈夫？」

「も、問題はない。……ンツ……乳房の性感は、サイズに関係ないと理解。この本のとおり……痺れるような感じが……あつ、んっ……」

「そう言えば……小さい方が、感度はいいって聞いたことあつたかな」

何かの本で見た知識を思い出しながら、遼人は休みなく手を動かし続ける。

やっとはつきりとわかる反応を見せてくれた藍花を見ると、今まで我慢していた昂りが急速に燃え上がってきて、止められなくなってしまう。

「涼邑君……くっ、んあつ、はあ……くっ、ふあつ、ああ……」

「続けていいんだよね？　ここ……乳首も硬くなってきたるし……」

その水色の髪から覗く耳たぶに唇を寄せて囁きながら、手の平の中央に当たる硬い肉粒を集中的に撫で転がす。

薄い隆起へ押し込むように強く押し、手の平の動きを速めて左右に激しく弾く。

「んあつ、はあつ……大丈夫。っ……胸だけでなく、抽送もお願い……くんっ！」

激しさを増す胸愛撫に合わせて、段々と声も吐息で掠れ気味になってきた。

相変わらず痛いくらいのきつさで締まる膣壺も茹るような熱さになり、抽送をねだるよ
うに壁面が蠢うごめいている。

「う、うん。さつきより濡れてるし、これなら大丈夫そうかな……はあ……くあつ！」

又チュツ、ズップツ、ジュブツ!!　ズリュツ、ジュブツ、又チュルツ!

藍花の反応を見て、理性のタガが緩んだせいだろう。遼人はいきなり荒々しく、小ぶりの桃尻を打ち上げるような強さで、腰を振り動かし始めた。

乳房の快感で、愛液の量が増してきたのだろう。

その助けを借り、狭い肉道で思ったよりスムーズに肉棒が出入りを繰り返す。

「くっ、あつ、へ、平気？ 痛くないかな？」

「……痛みは薄れてきた。本のとおり、熱く疼いて……ふあつ、こ、これが性感……」

声を震わせながら、自分の感じている肉悦と本の記述を照らしあわせるように、ページを捲り続けているクール少女。

膈内が強く締まる間隔が短くなり、ペニスが動かせなくなるほど圧迫される度、気が遠のきそうな痺れが背筋を駆け上る。

「くあつ、うっ、はあ……んっ！ 周防さん、ごめん。俺、そろそろ限界に……」

「……限界？ ……疲れてしまったなら、私が代わって動く」

「いや、そ、そうじゃなくて。もう……はうっ、あつ！ で、出そう……!!」

そう訴える間にも、きつい処女穴をもっと味わいたいと、腰が自然と動いてしまう。

小さく息を切らしながら、膝上で上下に揺れる小柄な少女。

揺れる水色の髪から漂ってくるミントの香りに意識が蕩け、断続的に響いてくる射精の欲求を、これ以上堪えることができなくなりそうだ。



天然なのか、それとも確信犯か。翠は少し困ったように細めた目で屹立を覗き込みながら、空いている反対側の手で赤黒く張り詰めた亀頭を覆うように包み込んだ。

指先で張り出した傘をなぞるように擦り、手の平の少し窪んだ中央で、透明の粘液を滲ませ始めていた鈴口を優しく撫でる。

竿を擦る手で扱き出された先走り汁が、そのまま亀頭全体に泡と共に塗り込まれて、もう先っぽ全体が茹つてしまひそうなくらい熱く昂つてしまふ。

「翠さん、こんな、やば……ひうつ、くつ、んつ、あぁっ！」

「もう少し我慢しましょうね、遼人くん。まだ綺麗になつていませんから」
「でも、や、や、やばいですつて！　こんなつ、うぐつ、あぁっ！」

会話を続けることは勿論、この穏やかな淑女の暴走を止める余力もない。

ぐったりとして後ろにもたれかかると、自然と背中押しつけられたふわふわ巨乳との密着感が強くなり、そこを優しく擦られる疼きが握られた竿にまで響いてくる。

「もう、やばつ、ううつ！　出る、翠さん、俺……やばつ、ひいつ、くうつ！」

「ふふつ、どうぞ。お風呂はすつきりとリラックスする場所ですから。一日の疲れ、全部吐き出して気持ちよくなりましょうね、遼人くん。……さあ」

情けなく悲鳴を上げる少年を優しく宥める声と共に、爆乳の淑女の手が生き物のように蠢き、爆発寸前の肉竿へ絡みついてきた。

立てられた指先が、尿道に込み上げてきているものを導くように裏筋をなぞり、亀頭を包んだ手の親指の腹で、透明の雫を溢れさせる先が強く押し開かれる。

「で、出る、ううっ、うあああつ！ 翠さん、俺、はううっ!!」

頭が真つ白になるような甘美感に襲われた遼人が、悲鳴のような声を上げた直後。

ドブブツ、ビュルウツ、ビュブブブツ、ビュルツ!!

絡みつく指を弾き飛ばすように脈動する屹立の先から、真つ白な灼熱の液体が迸る。

「んっ、あらあら……こんなにたくさん。受け止めきれないくらい濃いお汁……」

「ふあひっ、くっ、すいません、俺……ひうっ、くうっ!」

「ふふっ、いいのよ。遠慮しないで全部出してすっきりしましょうね……さあ」

いつもと変わらぬ優しい微笑のまま、長髪の淑女は竿を下から上へ繰り返し扱いて、長々と続く放出を手伝ってくれた。

噴き出す白濁は、亀頭を包む手の平でも受け止めきれない量。飛沫となつて翠の腕や太股、少年自身の足やお腹、湯で濡れたタイル床にも散っていく。

「元氣ね、遼人くん。こんなにたくさん……んっ、それに濃くて健康的だわ!」

にこやかに囁く淑女は、射精が終わつても尚、屹立から手を離さずに扱き続けている。

尿道に残っていたわずかな雫も搾り出され、そのねっとりとした残滓ざんざいが手と竿肌の間でグチュグチュと淫らかな音を響かせながら擦れ、クリーム状に変えられていった。

「翠さん、もう……ひぐつ、はあう、んんつ、あああつ！」

射精直後で敏感な竿を容赦なく責められ、遼人はその痺れる快感に何度も背筋をくねらせながら、ひたすら情けない声を上げ続けることしかできない。

(ぜ、絶対に現実リアルじゃないぞ。こんなこと……)

ここ最近、女の子に襲われるという非現実的な出来事は何度か経験した。

だが、この貞淑で優しげな学園長にこうして責められるのは、完全に想像の範囲外だ。

少し落ち着いた後に理由を尋ねたいと思うが、背中からきつく抱き締めてきている淑女は、少年にそんな猶予を与えてくれなかった。

「あら、まだパンパン……やっぱり遼人くんくらいの年だと、一度ではダメなのかしら」

「はあはあ……あの、翠さん、何を……」

「いいのよ、今日はちゃんと……わたしが責任を持って、綺麗に洗ってあげますから」

戸惑う少年の耳元で囁いた翠が、火照る耳たぶへ優しく唇を落とした直後、立ち上がって壁際に置かれていたマットを床の中央に敷いた。

桶で汲んだお湯でそこを濡らすと、ただ呆然とそれを見守っていた少年の下へ戻り、再び背中から抱き締めるような形でしがみついていた。

「緊張しなくても大丈夫よ、遼人くん。さあ、立てるかしら？」

「は、はい。あの、でも……ふあ……」

質問の間すら与えてもらえず、遼人は甘い声に促されるまま、フラフラと立ち上がる。「それじゃあ……はい。こっちに頭を向けて。ふふっ、いい子ね」

そのまま敷かれたマットの傍らで屈み込まされると、まるで幼子を寝かしつける母のよな手際の上で、仰向けに寝かされてしまった。

逆らうこともできない。否、そういう気がまったく起きない、身も心も穏やかに蕩けてしまいそうな雰囲気。

一体、何が始まるのだろう。少し潤んだ瞳で見上げる傍らの淑女は、手に取ったボディソープを妖艶な身体の高ちらこちらへ塗りたくりつつ、少年の上に跨またがって来た。

「あまり長湯をすると身体に悪いから……いっぺんに全部綺麗にしましょうね」
「ぜ、全部……って……あの……」

言葉の意味を尋ねるよりも早く、「大丈夫」と言わんばかりに微笑んだ淑女が、その肉づきのよい尻房を誘うようにくねらせながら、腰を落としてきた。

——ズブズブツ、又チュツ、ズブズブツ!!
「ふえっ!! くんっ、あああつ、はぐっ、うっ、翠さん……んんっ!」

ヌルンツと滑る感触と共に、射精の余韻で痺れる屹立が熱いものに包まれていく。湯と泡に塗れた、大人の色香を漂わせる学園長の秘裂。

端で誘うようにふくれているクリトリスを竿の上で弾き、小刻みに震え蠢く肉唇に深い

キスをされるようにしゃぶられながら、中へ飲み込まれていったのだ。

わずかに顔を上げただけで見えてしまった、淫らな結合の一部始終。遼人は何が起こったのか頭の中で理解できず、ただ呆然と口を開けることしかできない。

「んくっ、あふあつ、ああ……あ、洗っているときからわかつていたけれど、たくましいわ、遼人くんのオチンチン。全部ちゃんと入るかしら……んふあつ、んんーっ！」

そんな少し不安げな呟きとは裏腹に、じっとり湿った淑女の膺壺は、いきり立つ屹立を先から根元まで余すところなく啜え込んでくれた。

太い怒張の形に沿って広がった、燃えるように熱い膺粘膜。

きつすぎず、ねっとりりと圧迫してくれるそこが小刻みに痙攣を繰り返し、竿肌を甘く慰めてくれるかのように擦ってくれる。

抽送を始めるまでもなく性感が高まり、根元に进りの予感が込み上げてきてしまう。胸に込み上げる羞恥と戸惑いも容易く押し流されてしまう、魅力的すぎる感触だ。

「あふつ、んっ、まだじつとしていてね、遼人くん。このまま前へ……んあつ」

小さく声を上擦らせながら、泣き黒子が魅力的な目尻をうっとり垂らした淑女が、大きく前のめりに倒れてきた。

ぷにゅんと小玉西瓜のような乳房が胸板の上で弾み潰れ、翠の熱い肢体がまるで掛け布団のように少年の身体を覆う。

「くんっ、す、少し重いかもしれないけど、我慢してくださいね、遼人くん。これで……
擦れば……はんっ、んあっ、ああっ、ふあひいつ、くうっ、んあぁ！」

ズチュツ、ヌップウツ、ゲチュツ、チュプツ！

翠の優しい声が熱く上擦ると同時に、覆いかぶさる肢体が前後に滑り動き始めた。
白い肌をしっとり濡らす、大人っぽいフェロモンたっぷりの汗と爽やかな香りの泡。

その助けを借り、先ほど背中に感じていたのと同じような形で、首筋からみぞおちの近くまでが幅広く押し潰された巨乳で擦られる。

（す、凄くヌルヌルして……くすぐったいの……き、気持ちいい……）

「ふふっ、どうかしら？ 普通に擦るより、優しく洗えるのよ、こうすると」

「はあっ、はひっ、うっ、く、くすぐったくて、ヌルヌルして……んあぁっ！」

柔らかく潰れた隆起で擦られ、硬く尖った乳首で程よい刺激を与えられる。

滑る肢体の動きに合わせて肉壺に扱かれる剛直も、先ほどの余韻で感度が高まっていることもあり、全体が甘い肉悦に打ち震えてしまっている。

（こんな、溶けちゃう……身体もチンポも、翠さんに溶かされちゃいそうだ）

まとも言葉も紡げず、息を切らして自分を責める淑女を見つめるだけで精一杯だ。

「可愛らしいところは昔と同じね、遼人くん。詩音ちゃんや美緒ちゃんや……んうっ、他の子たちが、すぐイケナイ気持ちになっちゃってしまうのも無理がないかしら」

クスクスと笑みをこぼしながら甘くからかってくる少女の言葉に、責められる少年はますます不思議な昂りを感じてしまう。

乳房で擦られる胸板も、粘膜肉にしゃぶられる屹立も、すべて形がわからなくなるくらい蕩けてしまいうさだ。

息を吐く度に意識が白い霧の中に沈んでいき、この優しく妖艶な年上の美女に、思うまま弄ばれたらという欲望だけが頭の中でふくらんでいく。

「はひっ、くんっ、ああ、み、翠さん。俺、こんな……ひぐっ、ううっ、ああっ！」

「遠慮なく声を出してくださいね。料理人に対する一番の褒め言葉は、『美味しい』という一言。それと同じで……こういうときは、素直にオマ○コが気持ちいいと思って、喘いでくれるのが嬉しいわ……はふうっ、んっ！」

「で、でも、くんっ、こんな……ひぎっ、はあっ、んっ、何で……ああっ!!」

促されるまま熱く喘ぎつつ、それでも必死に微笑む淑女へ問いかける。

突然の淫らな奉仕の理由は何なのか。それに対する不安がしこりのように胸の片隅に残っていて、辛うじて行為に溺れることを押し止めてくれている。

「別に特別な理由はないの。男の子を励ますには、美味しいご飯をお腹いっぱい食べさせてあげて……いっぱい気持ちよくしてあげるのが一番だから……んあっ……」

小さな笑みを浮かべた赤い唇で、泡塗れになった少年の胸へ優しくキスをしてから、髪



を振り乱して動く淑女が囁く。

「こうして……身体も心も気持ちよく解しておけば、難しい問題に体当たりで立ち向かっていこうという元氣も沸いてくるはずだから……あんっ、くっ、あふうっ！」

「む、難しい問題……んぐっ、くふあっ、はあっ、ああうっ！」

「そう。紗々羅ちゃんと詩音ちゃんと美緒ちゃん……遼人くんを挟んで争っている子たちの仲を解決するのは、当事者である遼人くんでなければダメ……んあっ、ああっ」

論すように語りながらも、妖艶な学園長は踊るように腰を左右へくねらせながら身体を滑らせ、少年の肢体や剛直をその身体全体で悦ばせてくれていた。

押しつけられた乳房で肋骨の浮いた腹部をくすぐられ、赤い唇で小さな乳輪を強く吸われて、飛び出てきた突起を舐め転がされる。

怒張をしゃぶるように扱く膾壺は、まるで意志を持っているかのように巧みな動きを見せている。入口や中ほど、次は最奥。ねっとり絡みついてくる肉道が順々に締まっては緩み、緩急をつけた刺激を与えてくれた。

「くんっ、うああっ、翠さん、俺……もう、中、気持ちよすぎて……ひいっ……」

とろみのある愛液が壁面から大量に滲み出てきていて、投げかけられる微笑と同じくらい優しいその温もりに、竿肌の表面が少しずつつ溶けていくよう。

快感神経が剥き出しにされ、そこを蠢く皺にくすぐられると、その度に失神してしまい

そうなくらいの甘美な電流が背筋を駆け上ってくる。

「いいのよ、遠慮しないで。学園生の健康管理もわたしの大切な仕事。転入早々、大変なことばかりで……疲れが溜まっているでしょう？ 今だけは昔に戻って、いっぱい甘えていいのよ。明日から、またみんなの主人公として頑張れるように……ね？」

背筋を大きくくねらせ、たわみ潰れる乳房を隅々まで擦りつけながら動く淑女の言葉の合間に、少年が機会を掴んで問いただいたと思っていた気になる単語が含まれている。

だが、今はとてもその余裕はない。誘いどおり、この甘い快感に身も心も委ね、思う存分感じたいという衝動で頭の中が埋め尽くされていた。

(したいこと……い、今、俺が……)

断続的に腰から響く射精の予感を堪えながら考えると、視線が自然とグニユリと潰れただらしない大ききの爆乳に引き寄せられてしまう。

胸板が息苦しいくらい押し潰され、首筋が谷間に挟み込まれる。

もっと敏感な場所での心地よい重みや圧迫を味わえたら……そんな妄想がふくらんでくるのを抑えられず、吐息が全力疾走したかのように荒くなっていく。

「ふふっ、何か思いついたかしら？」

「ふあっ、んっ、はあ……でも……こんな……ひいつ、くんっ、ううっ……」

「ダメよ、遼人くん。相手のことを思って自分を抑えるのは悪いことではないけれど……」

でも男の子は、時には強く出て、女の子を引つ張ってあげることも大切なことから。物語をリードすることは、主人公の大事な使命……その練習だと思つて……ね？」

焦らすように動きを止め、緩急をつけて肉道を締めながら促してくる翠の言葉に、遼人は遠慮やためらいの気持ちをすべて振り払い、我慢できずに叫んだ。

「あの、お、おっぱい……触つて……吸つたりとか……したいです」

「よく言えました♪ それじゃあ、ご褒美……今だけは、わたしが初めて会つた頃の遼人くん……赤ちゃんの遼人くんに戻つて、たくさん召し上がれ」

そう微笑を浮かべた学園長が倒れ込んでいた身体を一度起こすや否や、息を切らす少年の顔へ、その目を見張るサイズの柔らかな隆起を押しつけてきた。

「むごおつ、んむ、むうつ、んんんっ！」

まずは深い谷間に顔が完全に埋まり、頬が窪んでしまうくらい左右から強く押される。

胸板で感じていたとき以上にふわふわと綿飴やマシマロのような柔らかさがはつきりと伝わつてきて、口も鼻も塞がれる息苦しさも気にならないくらい、恍惚とした心地よさ。こうしているだけでもすぐ達してしまいそうだが、自分を抑えるなど散々煽られた少年の欲望は、まだまだ貪欲に燃え上がっていた。

「こっち……んちゅつ、はあ……んぐつ、れるつ、はあはあ、はむうっ！」

首を必死に左右へ振り、火照る乳肌へキスをするように唇を這わせて少しずつ昇ってい

きながら、遂に頂点で震えている桜色の突起を咥え込むことに成功した。

漂ってくる香りのとおり、まるでキャンデイのように甘ったるい味わい。その大きさも相まって、吸つていればミルクが逆るのではないかという錯覚すら感じてしまう。

「むぐつ、ちゅぱつ、はあつ、ちゅつむうつ、んぐんぐつ！」

「あらあら、遼人くん、本当に赤ちゃんに戻ってしまったみたい……んっ、いいでちゅよ、遼人ちゃん、そのまま私のおっぱいをたくさん飲んで、元気になって……」

おっとりとした淑女には珍しい、少しからかうような言葉に羞恥を感じる余裕もないくらい、胸をしゃぶる少年はその味わいに夢中だった。

もう他のことは、下腹部の甘い疼き以外考えられない。本当に赤ん坊に戻ってしまったかのように、思考回路が単純になつてしまっている。

「ふふつ、素直でいい子の遼人くんに、たくさんご褒美をあげるわ……あんっ、元気なオチンチンからいっぱいミルクを搾つてあげるわね……あふうつ、んあつ、ああんっ！」

グチュツ、又チュウツ、ズップウツ、ジュリユウツ!!

恍惚と微笑む淑女は大きく身体を倒し、少年の口に乳房を押しつけたまま、その艶かしいヒップを上下に素早く振り動かし始めた。

今度はどこどころではなく、全体がくまなく締まった肉壺が、ふくれあがった怒張を一回り小さく圧縮するかのような強さで締め、表皮をこそげ取るように擦る。

早く、早く。そうねだるような素早いリズムで膣壺もきつく収縮し、肉傘が壁面に食い込んでしまふくらい、強烈に圧迫されてしまふ。

「あふうっ、ほら……遼人のオチンチン、あたしの中でビクビクしてる！ あたしの方が気持ちいいって言ってくれてるう……にやふうっ、んうっ！」

「美緒、ダ、ダメ……そんなにされたら、すぐに……うぐっ、ああっ！」

「ずるいよ、美緒お姉ちゃんまで！ おにい、次はボクう……ボクのおマ○コもお！」

「遼くん、浮気はほどほどにして……ちゃんと遼くんのお嫁さんおマ○コ、いっぱい使ってくれないとダメです！ あまり寂しくされたら、私……ふふっ、うふふっ……」

「わ、わかつてる！ 順番！ ちゃんと順番にするから!!」

蠢く膣壺の締めつけと、次々に投げかけられる乙女たちの甘ったるい求め。

遼人はもう意識朦朧としながらも、とにかくその声に応えなければいけないという使命感に背を押されるまま、三人仲よく並んだ膣壺を順番に貫いていく。

——ズリユウツ、ヌツプウツ、ジュブツ！

「はひっ、んうっ！ いいよおっ、おにいっ、くんっ、ひふあっ、あああっ!!」

まだまだきつく、肉棒が一回り圧縮されてしまいそうな妹の膣内。

「ふあひっ、んんあっ、はあ……くんっ、あああっ！ 遼くん、もっとお……し、子宮の中までオチンチンでいっぱい掻き混ぜて……はひっ、くんっ！ オチンチンにエッチに

吸いついて離れない発情オマ○コ、じゅぼじゅぼしてくださいっ!」
淫らな叫びを上げながら、搾るように活発に蠢くヤンデレ少女の肉道。

「いいっ、お腹の奥、ズンツて響くう……にゃあ、もう……ほ、本当に子宮まで全部、遼人だけのものになってえ……はひっ、う、嬉しいわけじゃない! ないけど……奥、キュンって疼いて止まらないよお……くっ、にゃふああああつ!!」

そんなツンツンとした物言いと違い、熱っぽく絡みついてくるツンデレ少女の雌壺。

それぞれに特徴的な感触と、投げかけられる、聞いているだけで恥ずかしくなってしまう淫靡な叫びが、少年の理性と欲情を際限なく昂らせていく。

(こんなの、リ、現実じゃなく! なさすぎる!!)

妹と美しい幼馴染みたちが、自らの屹立を奪いあうように乱れ喘いでいる。

あまりにも淫らで、理性が吹き飛んでしまいそうな現実。

本人たちから望まれているからといっても、禁忌の想いは拭いきれない。それがますます背徳の快感を高まらせ、もう根元に込み上げてきている射精の予感を抑えきれない。

「もおっ、らめ……おにい、ボク、イツ……ちやあつ、んんっ! い、一緒にい……!」

そんな兄の限界を察したのか、丁度刺し貫いていた妹が、甘えるように訴える。

「あ、ああ……いいぜ、紗々羅……くあつ、ううっ!」

絶頂を訴える妹の声に合わせて、遼人は泡立つ蜜液を掻き出すように激しい抽送を繰り返

し、タイミングを合わせて射精への階段を昇りつめていく。

あと一往復で、限界。その予感に、奥を突いた反動を生かして剛直を膣内から引き抜こうとした……その瞬間だった。

「イクうつ……おにい、ボクと一緒に……ボ、ボクの中で……ひんっ、くんんっ！」
「へっ……うわっ、ちょ……お、おい!!」

ガシッ——そんな音が聞こえてきそうな勢いで、今までぐったりと地面に投げ出されていた妹の細い足が、腰に絡みついてきた。

グイグイと少女の割れ目へ腰が引き寄せられ、怒張を抜くことができない。

「きて、おにいっ、はへえ……ふあひいつ、イイツ……イクウツ、イクうつ！」

「紗々羅、待て……うわっ、やつ、うつ、あああああつ！」

「遼くん？ まさか……」

「ちょ、ちよつと遼人！」

「うわっ、無理……んくっ、ああああつ!!」

左右で見守っている幼馴染みたちの悲鳴に合わせたように、更にきつく狭まる膣壺。理性では到底抗えない痺れる刺激に、堪えていた快感が一気に弾けた。

ドブブウツ、ビュブルウツ、ビュブブブ!! ドクドクウツ、ビュルルウツ!

「はへえっ、ンンツ!! あはあ、しゅごお……きてるう……おにいのミルクう、ボクのお



腹に流れ込んで……はへえ……あはあつ、ゆ、夢みたい……」

「さ、紗々羅、おまつ……うあつ、くうつ……」

幸せそうな妹の顔を間近で呆然と見つめながら、遼人はうねる肉壁の動きに逆らえず、ドクドクと幹竿を脈動させ、マグマのように熱い迸りを放っていく。

噴き出た白濁が少女の小さな子宮を打つ度、火照る身体が大げさなくらい震える。

『赤ちゃんを作るようなことをしなければ』

行為前、自分を誤魔化すために課したことを破ってしまったと実感させられる光景。

「や、やばっ……紗々羅、何でこんなこと!？」

「だって……は、初めてはちゃんと中に欲しかったんだもん♪ はへ……幸せえ……」

取り乱す兄とは裏腹に、自らの願いを完全に満たすことができた妹は、恍惚に頬を綻ばせたまま目を閉じていく。

腰に回された足も再び地面に投げ出され、痛いくらい締めつけてきていた膣壺も、普通に引き抜ける程度には緩んできた。

どうやら激しい絶頂の悦びで、意識が完全に飛んでしまったらしい。

「ま、まずい、まずいって……」

慌てて腰を引き、今まで自分のもので埋めていた肉壺を眺める。

ゴボゴボと溢れ出てくる白い液体は、間違いなく、自分が注いでしまったもの。

(ししゃ、洒落にならない!!)

近い未来、起こってしまうかもしれない現実に恐怖し、顔を強張らせる。

その前に……それは別の厳しい現実が、もう目前に迫ってきていた。

——ドガツ!

「なっ……うわっ!?!」

不意に肩を突き飛ばされ、否応なしに地面へ仰向けに倒れてしまう。

何が起こったのか。それを確かめるよりも早く、不意に下腹の辺りが息苦しくなるほどの圧迫感が、射精を終えたばかりの肉幹を包み込んだ。

「りょーうーとー……?」

「……おかしいですよね、今の」

恐る恐る首を持ち上げた少年の目に飛び込んできたのは、自らの股間に顔を埋めてきている幼馴染み二人。詩音の細い指が行為の残滓で濡れた竿胴に絡みつき、美緒の白い手の平が、その下の鞆丸袋をしつかりと包み込んでいたのだ。

「あ、あの……二人共?」

「赤ちゃんを作るようなことはやめなさいって……注意したわよね、あたし?」

「遠くんの赤ちゃんを産む資格があるのは世界で私一人なのに、何で紗々羅ちゃんの中で……ふふっ、うふふっ……義妹に情けをかけて、一度だけの過ちを断腸の思いで許してあ

げたというのに……裏切られた気分です」

黒い髪のヤンデレ少女は勿論のこと、金髪のツンデレ少女の瞳からも光が消え、揃って背筋が凍るような冷たい眼差しになっていた。

急所を掴んだそれぞれの指の力も次第に強くなっていき、言い知れぬ不安が息苦しいお腹の辺りにふくらんでくる。

「あ、あの、二人共、今のは事故で……その……」

「うるさい！ お、おしおき！ こんな聞き分けのないオチンチン、おしおき決定!!」

「いいですね。美緒さん、仕方ありませんので、今日だけは協力しましょう。この堪え性のないオチンチンが……二度と、こんな失敗をしないように躡けないと」

「お、おしおきつて、あの……」

——ズリュツ、ジュブブツ！ ズプウツ！

「はぐつ、んつ、ああつ、ちよ、な……んあつ、あああつ!!」

尋ねるよりも早く、スイッチの入った暗い表情のままの詩音が腰に跨がってきた。

まだ射精の余韻で勃起したままだった怒張が、十分に突き解されていた

「ふふつ、こうして……んあつ、はあつ、全部搾り取ります。もう紗々羅ちゃんにいけないことができないように、徹底的に！ キンタマが空になるまで射精させちゃいます」

鬼気迫る上擦った声で叫びながら、黒髪の美少女はそのむっちり艶やかな尻房を遼人

の腰で弾ませるように、いきなり素早い抽送を始める。

肉傘が壁面を抉るように擦り、結合部から掻き出された愛液が泡立ちながら辺りに撒き散らされる、盛大なピストン。

まだ絶頂直後で敏感なままの屹立には、あまりにも強すぎる刺激だ。

「ひぐつ、ま、待ってくれ、詩音！ 美緒、た、助けて……んあつ、ああつ！」

「却下。今回ばかりはしーちゃんに賛成！ そうね……か、空になるまで搾り取れば、あんな悪さはできなくなるわよね！ これは仕方ない！ べ、別にあたしも遼人の赤ちゃんを孕みたいとかそういうことはない……んっ、はあ……んちゅっ……んうっ……」

まだ光の消えた瞳のまま、小声で呟く美緒が、乱暴に少年のブレザーとシャツをはだけさせるや否や、胸板に顔を埋めてきた。

「んちゅっ、はあつ、さつさと射精させちゃう……次はあたし！ あたしの番だから！」

赤い舌先が少しだけ尖っている乳首へ伸びてきて、そこを執拗に舐め転がされる。

くすぐったいような刺激に自然と腰が浮き、肉壺への挿入が更に深くなってしまう。

「ふふ、そうです、美緒さん。このまま……んうっ、闘争ロツダです。どちらが多く、遼さんの赤ちゃんの素を子宮で受け止められるか……んあつ、はあつ、さあ、まずは私が先行させてもらいますっ、はんっ、出して……くんっ、イイツ……くりゅっ、んっ、遼くんのミルク……オチンチンミルクで、お、お嫁さんマ○コ、イッチャあ……んっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なり、美少女の方向性で書き進められる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



ニミタクアンリアル

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!



P comic

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクラインズ

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!